

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730728

研究課題名(和文)「知識の獲得」に関する理論的・経験的研究

研究課題名(英文)Theoretical and Empirical Study on "Acquiring Knowledge"

研究代表者

森 一平(MORI, Ippei)

東京大学・社会科学研究所・助教

研究者番号：90600867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円、(間接経費) 360,000円

研究成果の概要(和文)：教育や学習を通して知識を獲得すること、このことはしばしば、知識をひとの「内面」に蓄積しまた定着させることであると考えられている。しかし実際の教授・学習過程は、内面など参照することもなく取り行われている。本研究はこの点を踏まえたうえで、エスノメソドロジー・会話分析の方針に基づきながら教育実践のビデオデータを仔細に検討することにより、「知識の獲得」をめぐる人びとの実践と、その編成技法の多様なありかたを明らかにしたものである。

研究成果の概要(英文)：Acquiring knowledge through education and learning is generally-regarded as building it up "inside" people. However, we do not take into account "inside" in actual education and learning. In light of this point, we studied and found out various members' practices and its constitutive methods concerning "acquiring knowledge," through analyzing video data of educational practices in detail basing up on the policy of ethnomethodology and conversation analysis.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：教育学 社会学 教育社会学 学習 社会化 知識の獲得 エスノメソドロジー 会話分析

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は本研究開始当初まで、社会学・教育社会学領域における基礎概念の1つである「社会化」についての研究を行ってきた。社会化とは特定の社会的地位に結びついた役割性能の獲得を意味する「学習」の下位概念であるが、それはしばしば特定の価値・規範を「内面化」することと同義に捉えられてきた。つまり、ある価値・規範的な知識がひとの内面の一部になることこそが、社会化であるとされてきたのである。

こうした社会化の内面化論的規定は、その上位概念たる「学習」についての理論的想定を(いくぶんか応用しながら)前提として引き受けているように思う。つまり、学習とは単に知識を獲得するということを意味するのみならず、「知識が内面に蓄積・定着すること」を意味するものであるという考えを前提としているように思われるのだ。

しかし、例えば教育実践において何らかの評価が行なわれるさい、教師たちは(そして私たちは)学習者の内面など参照することなくこれを遂行している。そうであるなら、学習の内面化モデルとはギルバート・ライルがそう主張するように、私たちの言語運用=実践のありかたを見誤ることによって生じた、単なる虚像に過ぎないのではないか。

あるいはそこまで主張しなくとも、内面化モデルに得心してしまうことによって、そのモデルの手前にあり、そのモデルがそもそもそこに根をもっていたところのもの。つまり、私たちが教育や学習を行うさいに実際になしていることそのもの、これが顧みられなくなってしまうことは非常に大きな問題であるように思われた。

2. 研究の目的

本研究では上述のような問題意識を踏まえることで、そもそも「知識の獲得」が問題になるときに人びとが実際に行っていることに焦点を当て、その内実を内面化論的な思考にとらわれることなく明らかにすることを目的として掲げた。

研究を遂行するさいにはこの目的を以下2つの問いにブレイクダウンしたうえで、それらをそれぞれ解き明かしていった。

(1) 「知識が獲得された」ということが教育実践上問題になるとき、その実践はいかなるしかたで編成されることになるのか。

そしてまたそうした実践のありようは、「知識がこれから獲得されようとしている」場合とではどのように異なっているのか。

(2) 「想像」や「意見」など、いわゆる「知識」と関わりの深い諸概念(これらもまた「内面」において生じ、あるいは保持されていると考えられているものである)も教育実践において取り扱われるが、それらが扱われるさいの実践の編成は、知識の獲得が問題となる

場合とどのように異なっているのか。

後者に関しては「知識の獲得」というトピックを真正面から取り上げた問いではないものの、それと深く関わりながら、しかしそれとは異なる実践をも同時に取り上げることで、「知識の獲得」をめぐる実践それ自体の輪郭を際立たせてくれたように思う。

3. 研究の方法

本研究は教育実践を何らかのしかたで切り取った経験的データをもとに遂行する必要があったが、そのさいには教育実践の内実をより詳細にわたって把握するため、主にビデオカメラを用いた授業場面の撮影によりデータを蓄積していった。

本研究プロジェクトの開始年度である2011年度には首都圏にある某小学校にフィールドエントリーし、そこにおいてほぼ月に1度のペースで授業場面の撮影を行った。

主たる撮影対象は第1学年3クラスの授業場面にすえた。これは本研究が「社会化」を視野に入れたものであったためであり、小学校これもまた1つの「社会」にほかならないに入学したての第1学年においてこそ、しばしば社会化の場面が観察できるように思われたからである。

撮影は2台のビデオカメラを用いて以下のように行った。1台は三脚を用いて教室の左右後方いずれかに教室の全景が収まるよう固定し、もう1台はやりとりに応じて撮影の焦点を切り替えられるよう手持ちで撮影した。また、撮影と並行してメモを取り、フィールドノートの作成も行った。

こうして蓄積したデータを必要に応じて文字に転記し、人びとによる実践の内実をその編成技法に着目することで詳細に明らかにすることに長けたエスノメソドロジー・会話分析の方針に基づき分析した。

4. 研究成果

(1) 問い(1)について

上述の方法により蓄積した映像データのなかから、とくに「知識の獲得」が児童たちに帰属されている場面を選定したうえで、その帰属がいかなる手続き的条件のもとで行なわれているかを検討していった。

そのさいさらに、教科的な知識が問題となっている場合と規範的知識が問題となっている場合とを比較し、上記条件が両者においてどう変異するかについても検討した。

着目したのはヒュー・ミーハンの言うIRE連鎖である。「発問 応答 評価」からなるこの連鎖は、教育実践においてしばしば児童たちの知識を確認するのに用いられる。それゆえこのIREの連鎖が駆動する条件を明らかにすることは、それがそのまま「知識の獲得」の帰属条件を明らかにすることにつながる考えたからである。

データを分析した結果明らかになったの

は、大きく分けて以下の4点である。

第1に IRE 連鎖は、そこで問題となっている知識を児童たちが「知らない可能性」に動機づけられて駆動していた。これこそが、「知識の獲得」が児童たちに帰属されるための基本的条件(の1つ)である。

そのうえで第2に、教科的な知識が問題となる場合にはこの基本的条件が、「ある児童は知っているがほかの児童は知らないかもしれない」という形式に具体化されていた。

第3に、規範的知識が問題となる場合には上記条件は、「規範を知らないから従えないのか/知ったうえで従わないのか」を区別しがたいという形式に具体化されていた。

第4に、こうした相異なる2つの条件は、両者に動機づけられて駆動する IRE 連鎖に、それぞれ特有な実践上の機能を与えていた。

例えば前者の条件は、発問の宛先を特定の児童のみに限定することにより、IRE 連鎖を用いて行なわれる授業の「導入」部分をスムーズに遂行することを可能にしていた。他方で後者の条件(規範的知識)のほうは、「規範を知っていたのに従わなかった」ことを IRE 連鎖を通じて浮き彫りにすることにより、生徒たちの振る舞いを叱責するための理由を生成可能にしていた。

(〔学会発表〕)

(2) 問い(1)- について

この問いについてはとくに、授業場面において教師から児童たちへと発言の順番が移行する局面に着目して検討を行った。

授業場面において発言の順番が移行するさいには、ほとんどの場合教師が児童たちに質問を行うことによってこれが成し遂げられるが、教師の質問に児童たちが応じるやりかたには大きく分けて「一斉発話」と「挙手」の2つがある。そのうえで、一斉発話によって反応するのが正しい場合と挙手によって反応するのが正しい場合とがあり、児童たちはこの2つのどちらが要求されているのかを識別しなければならない。

両者はいずれも教師の質問によって導かれるのであり、また児童たちが2つの要求を識別するための手がかりは教師の質問においてしか存在しないのだから、教師の質問は児童たちが両者の要求を識別できるような技法を用いて組み立てられていなければならないだろう。このときに鍵となっていたものこそが、獲得済みの知識か、これから獲得されていくべき知識かという区別であった。

すなわち、教師がその質問のデザインを通して、それが「みんなが知っていることがら」を問うもの(sK+質問)であることを示すとき、児童たちにはそれに一斉発話で応えることが要求される。他方、その質問が「一部の児童(たち)しか知らないことがら」を問うもの(sK+/K-質問)であることを示すときには逆に、児童たちには挙手によってそれに応じることが要求されていたのである。

ここで、ある質問が sK+質問であることを示すやりかたとしては例えば、当の質問を統語的には不完全な位置で止める「順番の不完全構築」などの技法が、sK+/K-質問であることを示すやりかたとしては、当の質問を応答可能者の名乗り出を求めるものに変質させる「K+特定質問」などの技法が、それぞれ用いられていることが明らかになった。

(〔雑誌論文〕)

(3) 問い(2)について

授業において児童たちに「想像」や「意見」などが求められる場面を選定し、検討した。そのうえで、分析を行うさいにはさらに、以下の2つの局面に焦点を当てた。

1つは先にも述べた発言順番が移行する局面であり、特に「挙手」が児童たちの応答に求められる局面。もう1つは児童たちの誤りに対して教師が「訂正」を行う局面である。

分析の結果以下の2点が明らかになった。

第1に、児童たちに「想像」や「意見」が求められるときにはほとんどの場合、「挙手指名」の連鎖を通して教師から児童たちへと発言の順番が移行するが、このとき児童たちに求められているものが原理的には正解も不正解もない想像や意見であるがゆえに、挙手は「知識」の有無ではなく「意欲」の有無を有徴化するものになる。言い換えれば、このとき挙手は可能的にはすべての児童たちが行いうるものとなり、そのことがどのような帰結をもたらす。

すなわち、通常であれば児童たちの挙手が一段落した直後に(あるいはむしろそれ以前に)教師による指名が行われるが、児童たちに想像や意欲が求められる場合には「挙手指名」の連鎖が拡張され、そのさなかにさらなる意欲的な挙手を喚起するためのやりとりが挿入されうることになるのである。

第2に、すでに述べたとおり「想像」や「意見」には原理的には正解も不正解もないがゆえに、児童たちの想像や意見に何らかの間違いが含まれていたときにこれを教師が訂正することは、ともすれば児童たちの意欲や主体性を毀損してしまうことになりかねない。しかし児童たちの発言に何らかの誤りが含まれているならば、教師はその役割上これを訂正しなければならないだろう。

こうしたジレンマに対処するために教師は、例えば次のような技法を用いることで、児童たちの意欲や主体性を保護しながら誤りの訂正を行っていることが明らかになった。質問に対する肯定的応答の優先性を利用することで、当の児童自身に訂正を行わせる技法。訂正をあくまでポジティブな評価の後方に配置することで、そのネガティブな影響力を穏健化する技法などである。

(〔学会発表〕)

以上のように本研究は、「知識の獲得」という観点を中心にすえながら経験的データ

を詳細に検討することで、教育実践が編成されるさいのそのさまざまなありかたや技法を提示することに成功している。

その点で本研究は、教育（社会学）領域のエスノメソドロジー・会話分析研究において J.L. ヒープの以降主要な研究テーマとなっている「課題に応じた教育実践の多様な組織化」という論脈に対して、多くの知見を付け加えることができたと言えるだろう。

またそれだけでなく、本研究を遂行していくなかで知識の類型や認識性（誰が・何を・どの程度知っているか）に応じて教育実践の編成が様々に変異していくことも浮き彫りになったが、このことは研究代表者の次の研究課題を切り開くことにつながった。この点でも本研究は、非常に意義ある成果を生み出したと言えるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

森一平, 「授業会話における発言順番の配分と取得 『一斉発話』と『挙手』を含んだ会話の検討」『教育社会学研究』第94集, 2014, pp.153-172. (査読有)

〔学会発表〕(計2件)

森一平, 「知識の『在り方』と相互行為の組織化 教室における教授-学習場面の検討」日本教育社会学会第63回大会, 2011年9月20日, お茶の水大学.
Mori, Ippei, "Technology of Ordering Classrooms: From the Analysis of Reproach in a Classroom Lesson," 11th Conference of the International Institute of Ethnomethodology and Conversation Analysis: Technologies and Techniques, 7 Aug., 2013, Wilfrid Laurie University.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 一平 (MORI, Ippei)

東京大学・社会科学研究所・助教

研究者番号: 90600867